

# 魔法のWallet プロジェクト 活動報告書

報告者氏名：太田啓介 所属：町田市立南つくし野小学校 記録日：2020年 2月 7日

キーワード：学習意欲、個別指導、交流学习、自己理解、自己肯定感、プログラミング

## 【対象児の情報】

- ・ 学年：3年生男子児童 (特別支援学級在籍)
- ・ 障害名：AD/HD LD
- ・ 障害と困難の内容
- 通常級から特別支援学級へ転籍した際には自己肯定感の低下が顕著で、その傾向は現在も続いている。
- 情緒の安定をはかることが難しい。特に1年～2年時には物事が思い通りにいかないと激しく泣いたり、一人で怒ったりしていることが多かった。
- 多動傾向があり、学習や様々な活動に集中して取り組むことが難しい。

## 【活動目的】

- ・ 当初のねらい
  - (1) 将来的な通常級への再転籍を念頭に、学年相応の学力の定着を図る。
  - (2) 自身で情緒の安定や環境の調整を図れるようにし、安定して過ごせる時間を増やす。
  - (3) 成功への見通しをもって粘り強く取り組み、自信を持って行動する。
- ・ 実施期間：2019年4月～2020年3月
- ・ 実施者：太田啓介
- ・ 実施者と対象児の関係：学級担任

## 【活動内容と対象児の変化】

- ・ 対象児 (Kくん) の事前の状況

### 〈転籍に関して〉

- 本校に入学後、1年生の3学期に通常級から特別支援学級へ転籍した。知的に大きな遅れはないものの、情緒が安定せず学校内での行動も安定しなかったため、担任による一对一の対応が必要であった。環境の調整を早急に行うべく特別支援学級への転籍を行うこととなった。
- 転籍前に行った発達検査の結果からは知的に大きな遅れはないことが指摘された。そのため中学校での特別支援学級への進学は考えにくく、転籍時点の協議を行っていた時点で担任と保護者の間で「将来的には通常級への再転籍を行う」ことは話題となっていた。

### 〈2年生時の状況〉

- 魔法のダイアリープロジェクトの対象児童である。支援級における学習の支援と交流学习におけるノートテイクの支援、自己肯定感を高めるための感情の整理と記録、自身が主体となって交流学級とかかわっていくこと、などをねらいとして実践を行った。
- 特別支援学級での学習を積み上げ、2年生2学期から算数での交流学习を開始した。iPadを活用した支援を行い、学習の定着が見られた。しかしあるトラブルにより情緒が極めて不安定な状況となり、交流学习は途中で断念せざるを得なかった。
- 2学期終わり頃に情緒の安定が見られたことから、当時の交流学級にプログラミング教材「viscuit」を教える活動を行なった。交流学級への愛着が強い本児には大きな成功体験となった。

### 〈3年生への進級後〉

- 2年生時と比較すると、情緒は安定した状態である。激しく怒る場面はほとんどなく、気持ちが落ち込んで教室になかなか戻れなかったことが4月に数回あった程度である。そのような状況でも本人が自分で気持ちを切り替えて、学習に参加している。
- 情緒の安定がみられるようになったことから、算数での交流学习を再開することとなった。特別支援学級において学習を積み上げ、運動会後（5月下旬）より単元の開始のタイミングで通常級での学習に参加した。

今年度の取り組みを開始した時点での学習の習得状況を以下の図に示す。青・ピンクの色がついている部分は学習内容が定着していると判断できる部分、白い部分は十分に定着しておらず学習空白が発生している部分である。学習全般への取り組み状況として、1年生の転籍前後の期間、そして2年生の秋以降情緒が非常に不安定で、学習に取り組むことが難しかった。特別支援学級で設定のある国語と算数について注目すると、国語では漢字をそれぞれの学年で積み上げているものの、定着しきれていないものがある。2年生終了時に実施した漢字のテストでは、2年生配当の漢字の定着は4割程度で、誤答に注目すると漢字の細部に十分注目できていない様子がうかがえた（写真）。読解などは、理解する能力は決して低くないものの、一貫して積み上げられなかった影響か、正確さ、相手への伝わりやすさという点では学年相応の力にはまだ及んでいない印象であった。算数では、たし算、ひき算での空白は感じなかった一方で、わり算には若干の苦手意識があり、背景には九九の定着が実は不十分なのではと感じられる部分もあった。



## 学習の習得状況

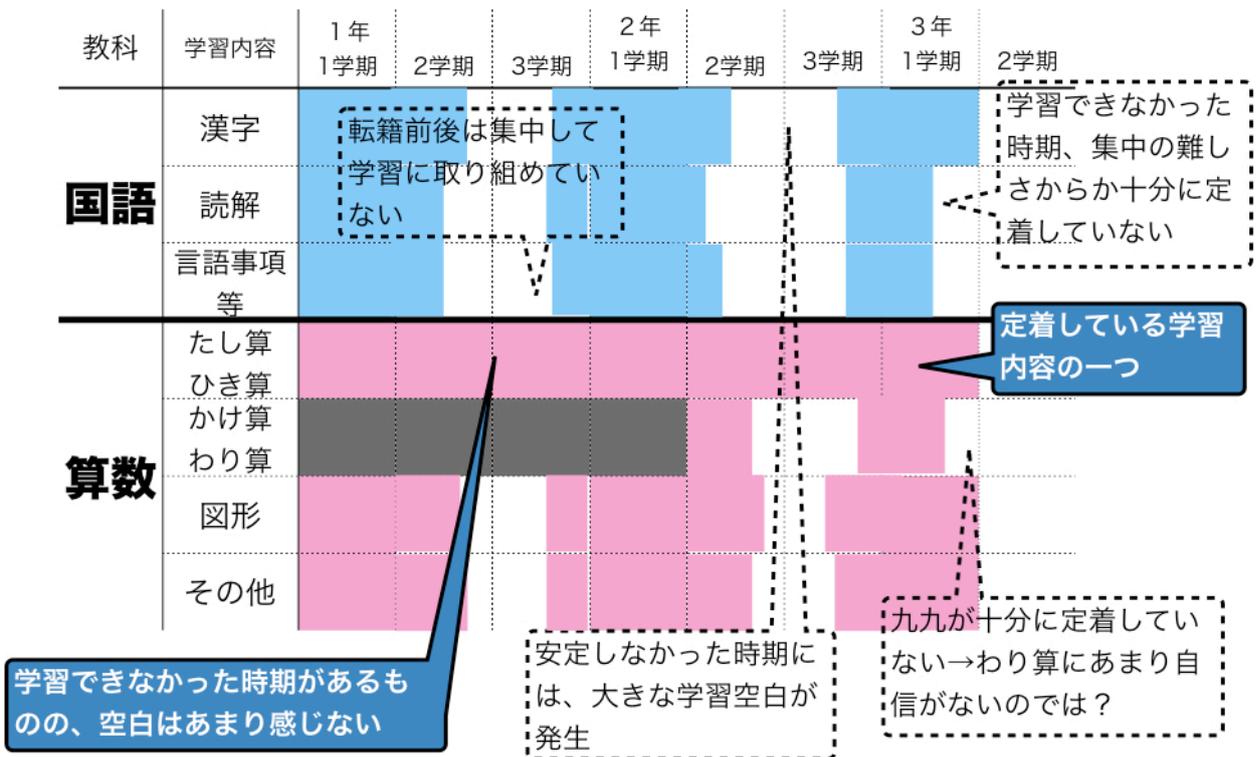


図 学習の習得状況

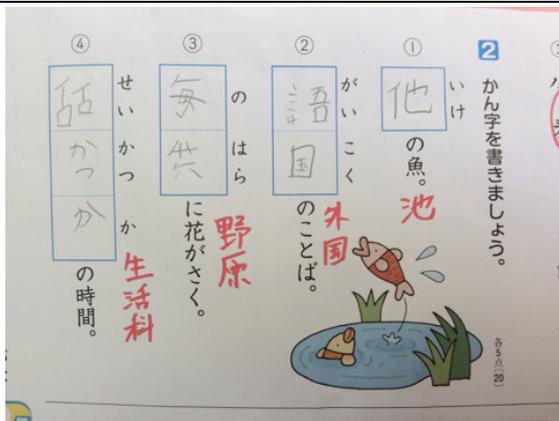


写真 2年生時の漢字テスト

・活動の具体的内容

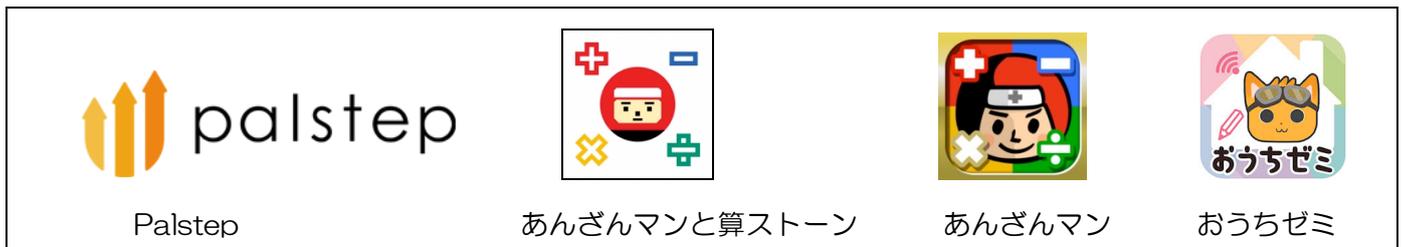
「通常級の3年生に相当する力が身に付き、発揮できるようになる」ことを取り組みの柱として、具体的な活動を設定した。

(1) 学年相応の学力の定着

今年度の指導開始時点で十分に定着していない2年生までの学習内容と、今年度に定着を目指したい学習内容を整理し、それぞれに対応する活動を設定した。

①【算数】3年生で学習する内容の定着

→2年生で定着が不十分と思われる内容を復習し、今年度の学習につなげるため、e-ラーニングシステムである「Palstep」と、ゲーム感覚で計算に取り組むことができる「あんざんマン」、「あんざんマンと算ストーン」を使用した。また、通常級で算数の学習を行う上でその見通しをもつために、冊子での学習と併用して動画を使って学習できる「おうちゼミ」で先行学習を行ったり、学習した単元の復習を行ったりできるようにした。



②【国語】漢字の読み書きの定着

→特に定着が十分でなく学習空白が発生していると判断したのが漢字である。2年生配当の漢字については「小2かん字ドリル」で未習得のものを中心に学習して定着を目指し、3年生配当の漢字については「小3漢字ドリル」を学年で使用する書き込み式のドリルと併用する形で学習した。



③【理科・社会】特別支援学級で教育課程上設定のない教科の学習

→通常級への再転籍を考慮すると、特別支援学級で設定のない理科や社会が大きな空白になってしまうことが想定されるため、3年生で学習する内容については一通り学習を行いたいと考えた。前述の「おうちゼミ」のほか、「NHK for School」の動画視聴などを通して興味関心を高め、学習内容の定着を図った。



おうちゼミ



NHK for School



写真 おうちゼミの使用場面（ドリル・動画教材）

## （２）大きな集団に適応できる情緒と行動の安定

3年生になって、2年生時よりも情緒の安定はしてきた。将来的には現在の集団よりも大きな集団で生活、学習していくことになる。より安定して過ごせる時間を増やすためには、自身の気持ちのコントロールや、人との関わり方や集団での振る舞い方などを理解し、実際に行動できるようになることが必要と考えた。

### ①自分の気持ちを知る・整理する

→自身の気持ちを肯定的に捉えたり、自身の気持ちを整理して表出したりすることを目的に「こち日記」と「Simplemind+」を使用した。「こち日記」は宿題としてその日のことを家庭で振り返るようにし、「Simplemind+」は日常的にというよりは、トラブルの後などの振り返りに必要な時に使用した。



こち日記



Simplemind+

### ②望ましいかわり方を考える

→集団の中でどのように振る舞ったら周囲との良好な関係を維持できるのか、望ましい行動を考えたり選択したりできる学習機会を設定した。「ピッケのつくるえほん for iPad」と「Droptalk HD」を組み合わせ、Kくんがこれまでにトラブルになった事象などで行動の指針となるような「こまったとき事典」を作成した。



ピッケのうごくえほん for iPad



Droptalk HD

## （３）自信をもって人とかわることができる経験を積む

→これまでの学習で、Kくんは「viscuit」や「scratch」といったプログラミング教材での学習で力を発揮してきた。その力を活かすことができる活動として「Pepper」を活用した。「Pepper」は実機であるがゆえに、間違っ指示を出せば間違いが明確に分かり、そこから試行錯誤し、成功するための見通しをもってプログラムを修正することができる。そして活動を通して自己肯定感を高めることが、彼が集団の中で人とかわる土台となると考えた。実施者が受け持つクラスの中でPepperの操作法について学ぶ機会を設定し、iPadや学校に配

備されている Chromebook を活用して様々な場面で Pepper を活用するプログラミングを行なった。プログラミングには「Pepper」の内蔵アプリ「robo blocks」を使用した。



・対象児の事後の変化

(1) 学年相応の学力の定着

**【算数】** 算数は交流学习を継続し、単元終了時点のテストで満点を取ることもあるように、3年生の学習内容が定着している。年度当初はかけ算九九の定着に不安があったが、「あまりのあるわり算」単元ではスムーズに計算ができており（写真）、直近の「2けたのかけ算」単元ではテストで満点を取っていて、年度当初に懸念していたかけ算九九は十分に定着できたと判断できる。

**【国語】** 漢字については、筆圧が強くなり、はっきりした字を書くようになった（写真 漢字テスト①）。2年生終了時点では4割程度であった漢字の定着は、2学期終了時点で7割程度まで改善している。（写真 漢字テスト②）間違えやすい傾向のある漢字があるため、引き続きの支援は必要と考えている。

**【理科・社会】** 3学期から理科の交流学习を開始した。まだ取り組みが始まったばかりではあるが、これまでの座学中心の学習から実際に物に触れながらの学習となり、意欲的に学習に参加している。算数とは異なる学習の進み方ではあるが、板書を取ることができている（写真）。

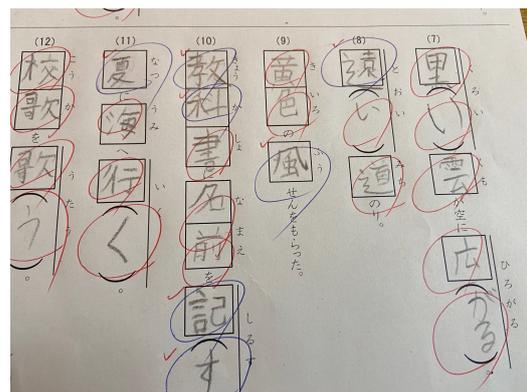
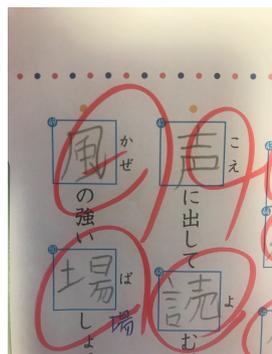
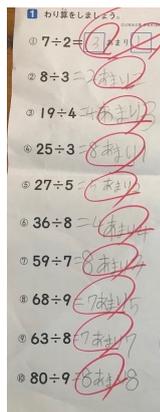


写真 「あまりのあるわり算」テスト

写真 3年生時の漢字テスト①

写真 3年生時の漢字テスト②

※青丸は誤答を修正したもの

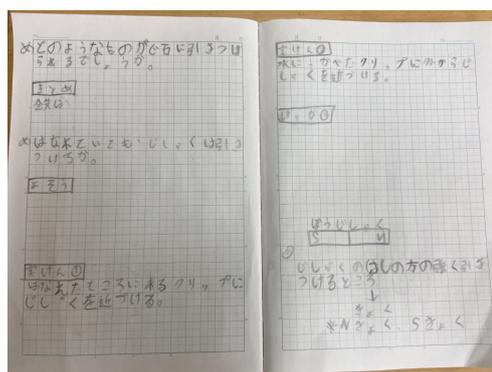


写真 理科（交流学习のノート）

## (2) 大きな集団に適応できる情緒と行動の安定

これまでと比較すると、情緒が不安定になっても自分で気持ちを切り替えたり、不安定さを解消しきれないままに行動に出すのではなくそれを言葉に出したりできるようになった。休み時間の遊びの時に、友達の行動に腹を立てて落ち着かない状況が発生したことがあった。実施者が個別に対応する必要があったのだが、その後使用した「Simplemind+」では、「こうすればよかった」（緑色で囲んだ部分）という考えに至るようになった。（写真）以前は自分の気持ちを出表することにとどまっていたが、自分がとるべきであった望ましい行動にまで考えが至るようになったのは大きな変化である。

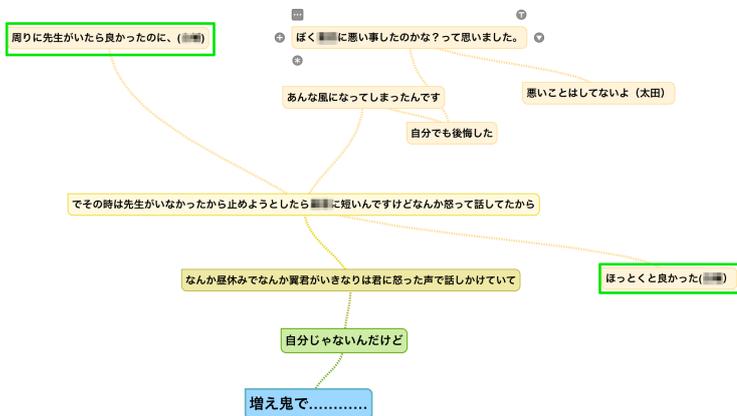


写真 「Simplemind+」の使用（遊び場面の事後の振り返り）

「こち日記」は、前年度「マイナスの気持ちを出表できる場」として機能するようになった。今年度も継続して使用中で、「良い」と「悪い」の2択だけではなく評価が出るようになった。自身の微妙な気持ちの変化に気づくようになり、その結果として前年度にあまり見られなかった「少し良い」や「普通」を出せるようになったのではないかと考えている。



写真 「こち日記」の使用

## (3) 試行錯誤と成功体験を通して自己肯定感を高める

実施者やクラスの上級生が参加している委員会活動で「ゴミの分別クイズ」や「委員会発表のセリフ読み上げ役」を作成したり、「南つくオリンピック」という校内行事の際に風邪をひいて声を出せなくなった児童の代わりにゲームのルールを Pepper が読み上げるプログラミングを行ったりした。試作段階で期待通りに動かなくても諦めたり投げ出したりすることはなく、「こうすればいいのではないかと予測、修正し、意図するように動かすことができるようになった。

活動を進める中でのKくんは、「Pepper をプログラミングしているのは僕」、でも「自分だけでプログラミング

していくのは難しい」と気付くようになった。うまくいったと思った Pepper のプログラミングが思った通りに動かず、それを周囲の友達（主に上級生）に指摘されたことがある。以前の K くんであれば気持ちを抑えられず反発して怒る、あるいは泣いていた可能性がある。しかし「動きがちょっとおかしい」、「セリフの間が足りない」といった指摘に対して「そうか。」と納得して修正したり、上級生から具体的に修正点を指摘され、それを受け入れたりしたこともあった。これは自分でできるという自信があり、だからこそ「こうすればいいのではないか」と彼なりの見通しをもって考えられたことと評価している。



写真 RoboBlocks の操作



写真 RoboBlocks 画面

#### 【報告者の気づきとエビデンス】

### ○多様な学び方を確保できたことで、学習の積み上げに寄与できたのではないか。

(交流学習 (算数) の担当教員より)

「学習については (同じ学習グループの子と) 遜色ない。」

教科学習に関しては、特別支援学級における補足的、あるいは先取りの学習や家庭での学習の積み上げにより、一定の成果があった。学習の担当者から高い評価を得ることができた背景には、K くんにあった学び方を探しながら、いろいろな方法で学んでいける環境を整えての積み上げが効果的であったことと考える。担当者から K くんが直接称賛される場面も増え、学習には自信をもてるようになった状態と言える。

Pepper のプログラミングの際、iPad でのフリック入力からスタートしたのだが、最近では学校の Chromebook でのローマ字入力がメインとなっている。プログラミングはどのような入力方法でも構わない、一番やりやすい方法でやればよい、というスタンスで学習を進めてきた。50音キーボードよりも、フリック入力よりも、今年度学習したローマ字入力の方が早く正確にできるということに彼が気づき、今年度学習したローマ字の定着にもつながっている。



写真 Chromebook を使ったローマ字入力

○安心して自分の気持ちを出出できる手段を活用したことで、自分のことや周囲のことをより冷静に捉えられるようになり、自己肯定感も高まり、情緒や行動の安定につながったのではないか？

情緒の不安定さによって学習に参加できないような状況になった回数を次に示す。昨年度は1ヶ月単位でカウントできるほどに学習への参加が難しく、特に学級全体など一定規模の集団で活動する学習への参加が困難であった。今年度授業に参加できなかったのは、直前にはっきりとしたトラブルがあり、気持ちを切り替えられなくて参加できなかったパターンがほとんどである。

表 学習への参加状況

	昨年度				今年度		
	9月	10月	11月	12月	1学期	2学期	3学期
怒る・泣く等があった日	7	21	11	4	5	7	2
授業に参加できない時間があった日	4	17	8	3	2	3	1

※昨年度10月初旬から情緒が非常に不安定に ※今年度3学期は1月末時点

Kくん自身の成長も含め、多くの要因が作用しての結果であると考えられるが、彼の意思の表出は豊かに、そして穏やかになってきた。

(友達が指導を受けている場面を見て)

「友達が怒られてると、僕が悪いと思っちゃうんだ。」

(クールダウンが必要な時の聞き取り)

「〇〇くんがルールを守らなくてずるいことをしてたから怒ってた。」

上の2つのエピソードのような場面で、昨年までの彼であれば、理由は何も言わずに怒っていた姿が想定される。しかし自分の気持ちの変動する傾向を読み取ったり、怒りの原因をはっきりと口に出したりする姿は、自分とその周辺を冷静に見ることができるように変化したものと捉えられる。

2月に特別支援学級と3年生通常級各クラスとの交流会が行われた。Kくんにとって、交流学級も含めてかわりの多い学年であるため、楽しみにしていた行事であった。そのうち1クラスとの交流会では、1年生、2年生時ともによくトラブルが発生する児童と同じグループで活動することがあった。実施者としては非常に心配する場面であったが、お互い多少は意識しつつも特に何事もなかったかのように交流行事を終えることができた。行事の後の実施者と彼との会話である。

(第1回目の交流でグループが同じであることに気付く)

(実施者)「〇〇くんと一緒にグループになったけど、大丈夫？」

(Kくん)「うーん、たぶん大丈夫。」

(実施者)「たぶん、っていうのが心配なんだけど・・・」

(Kくん)「今日は何もなかったよ。」

Kくんにとって意識しやすい相手、という認識がおそらくある。それでも行事の場面であるということを知り、今どのように振る舞うことが求められるか、ということを知り、彼なりに理解し行動できた。「大丈夫」「何もなかった」という言葉をはっきり口に出せたのは、彼の大きな変化である。

【今後の見通し】

Kくんは通常級へ転籍する予定である。学習や生活の環境が大きく変わることで彼自身が不安を感じたり、また新たな課題が発生したりすることも想定される。今年度の成果を踏まえて、今後の見通しを次のように捉えている。

①3年生までの学習事項の積み上げ

今年度特別支援学級であまり時間をかけられなかった、あるいは通常級と学習内容の違いがあった教科・領域（外国語活動など）や、学級の授業で取り扱えなかった教科（社会科など）について、次年度の学習を行う上で必要な基礎となるものがまだ不足している。今年度中に、そして次年度もこの部分の補充が必要になってくると思われる。

また、交流学習を行ってきたが教科は限られ、「大きな集団の中でかかわりながら学んでいく」という経験は不足している。ノートの取り方、望ましい振る舞い方など、通常級での学び方の定着を図っていきたい。

#### ② 4年生の学習

これまでの取り組みで定着の難しさのあった漢字、若干苦手意識がありそうだと感じている作文（自分の考えを整理して相手にわかりやすいようにまとめる）など、次年度以降の課題として残ることが想定される部分がある。今年度中に取り組むべきものは取り組み、次年度以降必要に応じてサポートできる体制を整えたい。

また、本校では4年生以上の学年で音楽を専科教員が担当している。これまでとは大きく学び方が変わる部分であり、これまでになかった学び方や教員とのかかわり方など、未経験の事象に対する不安を軽減していく必要がある。

#### ③ 支援体制

今年度まで、学級担任として実施者が直接的に支援を行うことができた。それが彼の安心を支えてきた部分もある。しかし転籍した後は、実施者が多くの時間をかけて直接的に支援することは難しくなる。そのため、学習上の課題に対して即時的に対応したり、時間をかけて丁寧に対応することで情緒の安定を図ってきたりしたことについては、これまでとは違った体制での新しい支援策が必要となってくる。校内外のサポート体制を整えつつ、継続的な支援体制を構築していくことが大きな課題である。